

ばき、と新品のペットボトルキャップから乾いた音が鳴る。ペットボトルの息の根を止めてしまった、自分の喉を潤すために。頭の中で黙祷。喉が乾いた。

手元にあるよくわからない機材。このボタンはエコーがかかる。このボタンはマイクが切れる。このボタンはジングルがかかる。あと、なに？ 右上の端っこのボタンに少しだけたまって居る埃。おれみたいだなあとそこに指を乗せて、そっと払ってやる。デジタル時計の数字が、ひとつ進んだ。

「本番一分前でーす」

ホチキスで留められたコピー用紙。大量につづられるネタ、ネタ、ネタ。数枚めくって、付箋のついている場所を確認する。見知った顔、うそ、ラジオネーム。

「本番いきまーす、3、2、1」

オープニング曲がブースを震わせた。フジファブリックで『茜色の夕日』。おれの向かい側ではマイクを仮面にしながら相方の小林が首をぐるりと回している。すこし音がちいさくなつて、息を吸う音が身体にひびいた。

「始まりました、フラッシュフラッシュの。パ。パラッチ！

お相手は私、フラッシュフラッシュの小島遊裕樹と」

「小林拓で、お送りいたします」

「はい、第44回目です」

「おもうそんなにいった？ はやいねえ」

定型文とオープニングトークを舌先に乗せているおれたちの間で、放送作家の鷹さんが真剣に目を動かしている。ブースの外をちらりと目だけで確認すると、プロデューサーやADが慌ただしくてんでんばらばら。たぐさんの大人たちに見守られて、今日も頑張る一時間。

「それではやっていきましよう。フラッシュフラッシュのパ。パラッチ、本日も最後までおつきあいくださいっ。

それではここで一曲、サイダーガールで『ぜったいぜつめい』

ええ曲かけるやんけ、とひとりでほくそ笑んだ。おれが毎週毎週決めている、おれのプレイリスト。小林は音楽に耳を傾けるふりをしながら、この一曲が終わるまでにフリートークで話すことをまとめているのだらう。細長い指がぐるりとペン軸を回転させる。ペットボトルを傾けて、小林の喉仏が上下した。ぺらぺらとコピー用紙の擦れる音。

最後のサビが小さな収録ブースを埋め尽くす。今から一時間、おれたちの発言はぜんぶ録音されて、二日後の放送日に電波に乗せられるのだ。にがくてあまいサンバは流れないけれど、わるくはない。

「……お送りした曲は、サイダーガールで『ぜったいぜつめい』でした。ねえ小林さつきさあ、冬の朝は準備が多いから遅刻するって話したじゃん」

「おお」

「おまえが早起きすればよくない？」

「……言うなよ、正論を」

ぼん、と鷹さんが左下のボタンを押すと、ジングルが流れ始めた。電子音電子音電子音。「フラッシュフラッシュのパ。パラッチ！」と番組名が高らかに叫ばれて、コマーション。プロデューサーがガラス越しに指で丸印をつくる。鷹さんが椅子の背にもたれて、ぎい、ときしんだ。

椅子に背中を預けると、中学生の重たい制服が蘇る。毎日毎日楽しくなくて、前ではよくわからない連中がよくわからない言語を使って騒いでいて、後ろではよくわからない髪の長い連中が時折こちらを見ながらひそひそと口元を隠して、おれはその狭間で酸欠になるしかなかった。

そんなおれに酸素をくれたのは、親でも先生でも神様でもなくて、夜中に聞こえる芸人の声だった。ダイヤルを回して必死に周波数を合わせて、ヘッドホンをきつく耳に押し付けて、毎日毎日やっと息を吸うことができた。なんでもないようなジングルが、十分にも満たないフリートークが、芥川賞も直木賞も鼻で笑うようなハガキが、胃の上の喉を広げてくれたんだ。

はじめて聞いたラジオで流れていた中村一義の『犬と猫』は、今もおれの人生の柱の一本だ。勉強机の上であるいは布団の中で、時にはベランダに寄りかかって。毎週面白い先人に憧れた痛い中学生のおれ、ダサイラジオネームをつけてダサイネタを毎日投稿して、はじめて読まれたときは泣けるくらいうれしかった。今週は採用されたかなって、それだけを楽しみに毎日生き延びていた。ぶかぶかだった制服から手首と足首がはみ出して、またぶかぶかになって肩回りがきつくなるまで、冗談抜きでおれはラジオに生かされていたのだと思う。

コマーシャルが消えて、ジングルに切り替わった。

「フラッシュラッシュの小島遊裕樹です」

「小林拓です！」

「この時間はフラッシュラッシュのパパラッチをお送りしております」

「はい。あのーこの前さあ」

なめらかに始まる小林のフリートーク。この声が二日後に電波に乗せられたときに、誰かが何かを思うのだろうか。笑ってくれたらいいな、とまた右上のボタンのほこりを払った。そうであるために、おれは芸人になったんだから。

大学も行かずに養成所の扉を叩いて、そこで出会った小林と手を組んで、ひたすらに己の面白いことを貫いて

きた。漫才して、コントして、オーディション受けて、キャラを掴んで。時々ぶれたし、今も大人気とは言いがたいけれど、何とか念願叶ってラジオ番組を持つことができている。

「いやなにそのベンチ。魔剤？」

相槌を打ちながら顎をさする。手首まですっぽり隠されたロンTはおれを自由にしてくれる。

「……で、そのベンチに俺も座ってみたわけよ。そしたらさ」

「おう」

「ちよー……きれいな景色だったわけ」

「しようもなっ」

タイムングよく流れ出すジングルを背景にして、小林とかけ合いを続ける。タイトルコールが流れてからも、小林は仮面越しにけらけらと笑っていた。鷹さんやADの男の子も肩を震わせている。おれ、今息をしている。うまくまわったことばかりではなかった。未だに上手に口は回らない。聴取率が他の曜日の同時帯より悪くて、何度も何度も打ちきりの危機を迎えた。おれたちの知名度がとんでもなく低いのもそうだし、そもそも今ラジオを聞く人も多くない。「動画サイトで観てます！」なんて堂々とリプライされてしまうくらい。半年にいちど

の改編期前には眠れなくなつて、よせばいいのにエゴサーチして、叩かれて、へこんで。

「時間の無駄」

「枠を譲れ」

「誰も聞いてねえよクソラジオ」

「フラッシュラッシュって誰？」

かいしんのいちげきは心臓を一直線に打ち砕いた。それを毎回毎回拾い集めて、なんとかつなげ直して今に至

る。セロハンテープと送られてくるメールでなんとかいきつないでいる。

ペットボトルに口をつけて、次のコーナー宛てに投稿されたネタメールを流し見た。付箋の貼られた採用メール文章を数枚見送って、ふと指先が付箋にひっかかる。

「……あ」

それは採用メールではなかった。付箋の貼られたコピー用紙の一枚前、いたって普通のネタメール。尺が余れば読んでください、程度のやつ。でもおれは、このラジオネームを知っている。

ラジオネーム『ノド』は今年の五月頃に、「自家発電も五月病を起こしている」という謎のネタメールを投稿してきた。おれたちがえらく気に入って電波に乗せた。それだけなら何の変哲もないが、放送後に番組名でエゴサーチをしたときに、まったく同名のSNSアカウントを見つけてしまった。どこかの三日月が映し出されたアイコンが、採用されたことへの喜びを素直につぶやいていた。

『僕、全然学校行けてなかったんだけど、最近パパラッチに投稿するメールのネタ考えて学校乗り切ってる』

いくつか繋がられたツリーの一番下に、その文章は綴られていた。あの時のおれみたいに、酸欠の奴がいた。

『ノド』がどうして学校に行けていなかったのか、それはおれにはわからない。そりゃあそうだおれはラジオパーソナリティだし、『ノド』はいちリスナーだし。おれとおなじで居場所がなかったのか、はたまた別の問題が『ノド』から酸素を奪っていたのか。ただラジオを聞いてくれているだけでは、全く読み取ることもできない。けれどその眩きを見て、ひとりの他人の糧になることができたと思心した。ゆらゆらと泳ぐ二匹プラスアルファ

の金魚が、金魚鉢を飛び越えて人のもとへ泳いだのだ。それから眩きを見ることは辞めたけれど、やってくるラジオメールで『ノド』を見る度にはっとしていた。あ、今週もなんとか生きています。

この前のスペシャルウィークでは、両手の指では足りないくらいにネタメールを送ってきてくれた。

その次の週、『靴履いて赤坂まで行く勇気がないので、手始めにツタヤの黒いのれんから始めたいと思います！』と送ってきやがった。

そんな『ノド』が、今週は何を送ってきたのか。

時計に目をやる。もうすぐでコマースペシャルが終わる。でも、どうしても気になった。背を丸めて、コピー用紙を持ち直す。

『こんなネタメールを書いてますがもうすぐ卒業です。ほんとうにパラッチに生かされてました。小説家が夢なので、絶対にフラッシュシラッシュのパラッチを題材にして一本書きます』

ネタメールの最後に、確かにそう書かれていた。

『ノド』『ノド』。顔も本名も知らないきみが生き延びたことが、なぜだか鼻奥をつんとさせている。ぶかぶかの制服で耳を覆っていた、いつかのおれと、机に突っ伏して身を護っている『ノド』の輪郭が、すこしだけ重なった気がした。気がしたんだ。

『ノド』よ。おまえは放送を聞いて、勉強机の上であるいは布団の中で、時にはベランダに寄りかかって笑っていたのかな。自分の投稿が読まれるか気にしたり、数多と読まれるハガキ職人に憧れたり。おまえの顔も身長も髪の長さもなにもわからないけれど、酸素ボンベはちゃんと受け取れていたかい。

ジングルがおれを叩き起こす。

「……フラッシュシラッシュの小島遊裕樹です」
小林が仮面の隙間からこちらをちらりと見て、視線をコピー用紙に落とした。

「小林拓です」

「この時間はフラッシュシラッシュのパラッチをお送りしています。……さて！今週もいきましよう！『世界はみんな五月病2022』のコーナー！」

張り上げた声が震えていますようにと、こっそり願った。勢いよくネタメールを読み上げて、ばかみたいに声を出して笑う。エコーもかけちゃう。うっすらと目に溜まった水をこぼさないように。

おれたちのラジオは万病に効く薬にはなり得ない。誰かの酸素になっても、誰かの毒になることだってある。発言を一步間違えれば炎上案件だし、そもそも改編期を乗り越えなければあつという間に墓場行きだ。

それでも、誰かが夜を越すための拠り所になっていたのなら、毎週声を張り上げる甲斐があつたつてもんだ。

ああ来週は何を電波に乗せようか。少しだけ明るいフリートークにしたつていい。面白おかしいやつがいい。机や布団やベランダで大声をあげて笑って、ひとり恥ずかしくなる誰かがいればいい。流す曲はこだわりたい、なんたつておれのプレイリストだから。

サニーデイ・サービスで『今日を生きよう』か。

真心ブラザーズで『どか〜ん』もいい。

久々にアナログフィッシュで『リー・ルード』

ザ・ガールハントで『世界はバランス』でも最高。

ええ曲かけたいやんけ、誰かのために。面白おかしい話で現実を忘れて明日の朝起きられたら万々歳。

ペットボトルが蛍光灯を反射させる。もうすぐ一時間が終わる。

「フラッシュシラッシュのパラッチ、そろそろお別れのお時間です」
軽快なエンディングを背にして、小林が息を吸う。

「この後深夜一時から『ツベルクラータの目玉焼き』が

ございますので、よろしければ是非お聞きください！」

「はあい、それでは今日はこのへんで」

エンディングが少しづつ大きくなる。

「ここまでの相手は、フラッシュシラッシュの小島遊裕樹と！」

「小林拓でした！また来週！」

「また！」

ブースの向こうで頷くプロデューサーを横目に、マイクを切る。また一週間後、このマイクを仮面にして、一時間頑張るのだ。できるだけ長く長く番組が続くよう、多く多く誰かに酸素を送れるように。

だからこの声が聞こえたら、適当に息をしてくれ。